COURRIER JAPON

2017.3.13

vol.01　コメディアンが恐怖を覚えるとき　イラン系米国人のコメディアンに、トランプが及ぼしたもの｜ケイン岩谷ゆかり

Text by Yukari Iwatani Kane

ケイン岩谷ゆかり　1974年、東京生まれ。米ジョージタウン大学外交学部卒業。1996年にロイターに入り、2006年〜11年、ウォールストリート・ジャーナル記者。15年からカリフォルニア大学バークリー校ジャーナリズム大学院講師。著書『沈みゆく帝国　スティーブ・ジョブズ亡きあと、アップルは偉大な企業でいられるのか』（日経BP社）ほか

Translated by Courrier Japon

ザーラ・ノールバッシュ
PHOTO: SARAH WELLS

ウォール・ストリート・ジャーナル記者として、アップル社をはじめとしたテック記事で数々のスクープを出してきたジャーナリスト、ケイン岩谷ゆかりが、トランプ政権下の米国のリアルな日常を描き出すレポート。著者の友人でイラン系米国人の女性コメディアンに何が起こったかのか？

36歳の女性コメディアン

数週間前、私は友人でコメディアンのザーラ・ノールバッシュのパフォーマンスを見に行った。ザーラは36歳のフェミニストで、イラン系米国人のイスラム教徒だ。彼女は、家族や、白人の米国人である夫のダンカンとの関係をネタにした小話やジョークで知られる。

そんな彼女のコメディが私はとても好きだ。彼女は、2つの異なる文化にまたがる家族のなかでよく起きる「小さな衝突」を取り上げるからだ。ザーラの家族はイランから、一方、私の家族は日本から米国にやって来たが、親と子が異なる文化で育った場合、家庭内に生じる力学は似ているのだ。

ザーラのネタのなかでもとりわけ好きなのは、彼女が学校のテストで「A-」をとってくると、父親ががっかりするという話だ。そして「A」をとってくると、「A+はどこかね？」と聞き、「A+」をとってくると、「なぜそんな簡単なクラスをとったんだ」と言う。これを聞いて私は、私の母もかつて似たようなことを言ったのを思い出した。

ザーラのコメディをもっとも特徴づけるテーマは、彼女と彼女の両親と夫の間にある絆についてだ。彼らは

口論することもあれば、意見を異にすることもある。一方、世の中の情勢はときに厳しいこともある。それでも彼らは、お互いのことを思い合う。陳腐に聞こえるかもしれないが、これは大切なメッセージだ。

9.11の同時多発テロ事件以来、イスラム教徒は良くて「あの人たち」、最悪の場合は「テロリスト」とみなされてきた。だがザーラは、自分の家族も、他のみんなと同じような不安や喜びや価値観を持っていることを観客にわかってもらいたいのだ。彼女のパフォーマンスには違いを越えて、お互いの共通点に焦点を当てる、そんな温かさがある。

「あなたたち、モスクにいるのよ！」

ザーラに、カリフォルニア州オークランドで6夜にわたって舞台に立つのだと聞いた私は、数人の友人に声をかけて一緒にオープニングナイトのチケットを買った。私はザーラの愉快で鋭い観察の数々を知る、楽しい夕べを期待して席についた。

ところが、その晩のザーラの舞台は、それまで私が見た彼女のどんな舞台とも違うトーンのものだった。

彼女は舞台に立つやいなや「みんな、ここで何しているの？」と観客に向かって聞いた。「ねえ、ここで何しているの？」と彼女は繰り返してから、「あなたたち、モスクにいるのよ！」と言った。

ザーラの言わんとしていることを理解するまで1〜2秒かかった。このとき私たちは、「北カリフォルニア・イスラム文化センター」内のカフェにいたのだ。ドナルド・トランプの反移民的な発言に人種差別主義者が意気揚々としているときに――。

会場となった北カリフォルニア・イスラム文化センター
PHOTO: SARAH WELLS

この同じ週の頭には、カナダのケベックシティにある、似たような施設で、右派でトランプ支持者の若者が銃を乱射し、6人の男性が命を奪われた。またその少し前には、テキサスのイスラム・センターが何者かに放火され、全焼した。（そしてつい最近には、11州のユダヤ人学校やコミュニティ・センターに爆弾を仕掛けたとする脅迫があり、避難指示が出された。）

だがザーラの心をかき乱した出来事はそれだけではなかった。ショーのまさに前日、覆面をした150人の活動家がカリフォルニア大学バークレー校の学生センターに石や花火や火炎瓶を投げつけ、右派系の論客マイロ・ヤノポロスの講演開催に抗議した。

ザーラはその現場にいた。若いミレニアル世代向けの「フュージョン」という多文化ウェブメディアの取材で行ったのだ。ザーラは、非暴力的なデモが行われるものと思って現場に赴いた。ところが抗議者たちは、警察が設置した鉄柵を撤去。破壊行為に身を投じる現場に彼女は居合わせてしまう。

「そのとき私、自分が走れるってことに気付いたの！」と彼女はジョークを言う。

「私、めっちゃ小心者なのよ！」

観客は笑いの渦に包まれるが、彼女がこのとき感じた恐怖が本物だったことは明らかだった。

会場では、警備員をみずから雇った

「恐怖」に関する逸話を集めたこのショーを、ザーラは父親にまつわる2つの話で締めくくった。最初の逸話は、父親がザーラの誕生に立ち会ったときの話だ。日本でも大概そうであるように、イランでも父親は伝統的に出産に立ち会うものではない。このためその経験はそれこそ彼の全身にショックを与える。

「そんな父が2度目に恐怖を味わったのは――いまです」とザーラは観客席に座る父親のほうを向いて言った。この晩、舞台に立つ自分の身の安全を彼がどれほど案じたかを語りながら、ザーラはかすかに声を震わせた。ザーラの父は、娘を見守るそのためだけに2時間、運転して会場に駆け付けたのだ。「お父さん、来てくれてありがとう。おかげで私も舞台に立つことができたわ」とザーラは言った。

私は胸がいっぱいになった。私はこのときまで「標的」にされる人の心境を真剣に考えたことがなかった。あとで知ったのだが、ザーラは本来ならショーの宣伝に使えたはずの助成金を、会場の入り口に立つ警備員を雇うために使った。

マイノリティの女性コメディアンとして売れるようになるまで、ザーラは二重のハンディを乗り越えなければならなかった。米国文化の多くの分野でそうであるように、この国のコメディ界も伝統的に白人男性によって支配されてきた。舞台における彼らのプレゼンスは、社会におけるその優越的なステータスと地位を反映す傾向にあった。

今日のコメディ界はより多様だ。だがザーラによると、マイノリティのコメディアンはいまでもジョークの表現の仕方に、少しばかり気をつけなければならない。なぜなら観客は、自分の世界観が過度に脅威にさら

されるのを好まないからだ。プッシュしてもいいが、やりすぎてはいけないのだという。

「それに加えて女性コメディアンは、見目麗しくなければいけない。面白くあることにチャレンジしてもいいけど、威圧的すぎたり、威嚇的すぎたり、男性の地位を脅かすような存在であってはならないのよ」とザーラは言う。

ザーラ・ノールバッシュ
PHOTO: SARAH WELLS

ボーイフレンドが無神論者だと、父に告げると

こうした現実を前に、ザーラは優れたストーリーテラーである彼女の特性を活かせる切り口を追求し、サンフランシスコのベイエリアで育った自らの経験に焦点を絞る。

ザーラのブレイクのきっかけとなった2010年の独り舞台のタイトルは「無神論者はみんなイスラム教徒である （All Atheists Are Muslim）」。内容は、ザーラの両親がいかにして彼女の白人のボーイフレンド（現在は夫）を受け入れるようになったかというものだ。

このショーのなかでザーラは、夕食時に両親と交わしたある会話を再現する。当時25歳だったザーラは両親に家賃を減らすためボーイフレンドのダンカンが彼女のアパートに引っ越してくることを伝える。「神の前で結婚しない限り、男女の同棲はあり得ない。以上。この話はこれでおしまい。はい、次の話題は何かね」とザーラは父親の口ぶりを真似る。

さらに、このあとの別のシーンで、ザーラはダンカンが無神論者であることを父親に告げる。私が好きなのは、父親の態度が変容していく様子だ。

はじめは教条的だったのが、最後には「宗教」の普遍的な定義に満足する人になる。「イスラム教徒とは

――」たんに「己より大きな力に服従する者のことだ」とザーラの父は言う。「ところで彼は“引力”の存在を信じるかね」と父は言う。「引力は彼より大きな力だ。それを変えることはできない。それに服従するしかない。彼はイスラム教徒だ！」とザーラの父は勝ち誇ったように言う。

私はイスラム教徒ではないが、ザーラが語る話の多くは、私自身の経験を思い出させる。私も大学を卒業した直後に、同じような経済的理由でいまの夫である彼と一緒に暮らしはじめ、父と気まずい会話を交わしたことがあった。

「白人男性が握る権力と戦うのが怖いのよ」

ここ数年、ザーラはこのショーを繰り返し披露し、そのたびにチケットは完売し、大爆笑と高い評価を得てきた。だが、なかにはザーラを批判する者もいる。彼女はもっと時事的な問題を正面から取り上げるべきだというのだ。「彼女の話はいずれも、9.11に答えを与えてくれるものではない」とある批判者は言う。

これに対してザーラは、これまで恐れ知らずの大胆な姿勢をとってきた。9.11の記憶がいつも以上に鮮明になる9月に、イスラム教徒であることの誇りを顕示するのは不謹慎だと言われても、彼女は構わず舞台に立ち続けた。2年前、彼女は活動家の友人と「＃良いイスラム教徒、悪いイスラム教徒」(#GoodMuslimBadMuslim)というポッドキャストをはじめた。

「私は、イスラム教徒に関する話が、いつも政治がらみで語られるのではなく、もっと偏りのないものにしようと必死だった」とザーラは言う。

「右派の視点からではなく、自分の視点からとらえ直したかったの」

だが先週、彼女は私に、自分たちはこの戦いに負けたのだと、悲しげに言った。ザーラはこう見る。

政府は、「イスラム教徒は悪人である」というイメージを定着させることに強い関心を抱いている――。これはザーラがパフォーマンスを通してやろうとしていることの逆だ。

「もし私が、彼らの悪意に満ちた視点を打ち壊すことに成功しているなら、彼らにとって私は邪魔な存在のはず」と彼女は言う。

「権力の座にある人々が、白人のナショナリズムを推し進めるなか、ステージに立って白人男性が握る権力と闘うのが怖いの。心底、怖いのよ」とザーラは言う。

ザーラ・ノールバッシュ
PHOTO: SARAH WELLS

ザーラは、オークランドで開催した6夜にわたるショーは、ここ最近ではもっとも難しいが、やりがいのあるものだったという。観客の受け止め方が、人種によって違ったからだ。

観客のなかのマイノリティは、ザーラが語る家族の話が、言葉にはされない恐れや痛みや不安を背景に展開するものであることを本能的に察知する。一方、白人の観客の多くは、彼女が時事問題をもっと直接的な形で表現することを期待していたようだ。

だがそれは必ずしも簡単なことではない。「ネタにしようとしている関心事やいろんな前提が、こんなに日々目まぐるしく変わるときにどうやって、ジョークを創り出せるというの？」とザーラは言う。

「大統領令が毎日のように発令されて、それによって市民である私の安全をめぐる諸事情ががらりと変わって、それだけでなく私の市民としてのアイデンティティまで脅かされようとしているのよ」

皮肉にも、そんななかザーラのコメディはひとつの環を閉じる。彼女は、イランの「語り部」、いまでいう「ストーリーテラー」たちが歴史を通じて、「物語」や「風刺」を、抑圧的な体制や社会に関するオブラートにくるんだ論評として利用してきたことについてよく考えるのだという。ザーラは自分のルーツに立ち返って、自分を取り巻く人々や人間関係について語っていくつもりだという。

「これまで以上にしっかりした意図を持って舞台に立たなければならないわ。道を切り開き続けなくては。そしてそのための場を創造していかなくては」とザーラは言うのだった。